

## 寺田寅彦と名古屋

山田 功

寺田寅彦の生れた月が自分の誕生月と同じであることを発見し喜んだのは、ずいぶん前の事である。寅彦先生は、11月28日生れ。私は11月2日生れである。月の終わりと、月初めでは幾分違うようであるが、11月生まれには違いない。

寅彦先生は、子供の頃「(学年で)一番弱虫で病身で意気地なしであった自分・・・」と随筆「相撲」に書いておられるが、私にも、この言葉がそっくり当てはまる。子供のころから胃腸が弱く、疎開先に医院ができた時、最初の患者が私であり、「胃カタル」と言われた。意気地なしで、運動会の徒競走では、いつもビリ2であった。一度だけ3等賞の鉛筆をもらったことがある。前を走っていた者が、続けて転んでしまったからである。小学1年の時、予防接種があり、注射をされる前から泣き、先生に笑われた弱虫でもあった。だから寅彦先生が子供の頃の繊細な心持を書かれた随筆を読むと、その切ない気持ちが痛いほどよく分かるのである。こんな共通点もあるのである。

寅彦先生は、子供の頃、わずかの期間であるが名古屋で生活をしている(明治12年、父が名古屋鎮台会計部長に転任。一家は東京より転住。寅彦先生2歳の時である)。名古屋生れ、名古屋育ちの私には、時代は違うがともに名古屋の空気を吸ったという共通体験があることが、何よりもうれしく、寅彦先生を身近に感ずるのである。この当時の思い出として、随筆に書かれていることは、知多半島大野での塩湯治と大須観音でおもちゃを買ってもらったことくらいである。三歳では、一般に当時の記憶はまだないから当然の事である。塩湯治については以前、大野海水浴場の調査を「櫛」に報告しているので、ここでは省く。明治時代大須観音界限は、名古屋の歓楽街としてとてもにぎわった。一時、その賑わいも消えたが、最近再び活況を呈している。本堂前広場をはじめ、大須観音通、万松寺通、仁王門通など、若者や、外国人でいつも混雑している。

寅彦先生が、中学5年(明治27年)の時、先生の父は日清戦争勃発で予備役招集となり、名古屋勤務となった。そこで、冬休みを利用して名古屋へ遊びに出かけたことがある。宿は父の定宿を使った。この時の事が、随筆「追憶の冬夜」に書かれている。父は忙しく帰りが遅い。ひとり寝付かれず、帰りを待つ心持が、よく描かれている。私にも、布団の中で帰りの遅い父を待った心細さの記憶がある。人力車の音に神経を集中する。いくつかの通り過ぎる音に、心細さを募らせていると、やっと宿の前で止まる音を聞くのである。父は「ほう、まだ起きていたのか。」と言って、びっくりした顔を見せた。寅彦先生は、ほっとし、父の顔に疲れをみるのであった。

その宿が、どこなのか気になっていたが、随筆「東上記」を再読し、やっと最近、知ることができた。「(前略)膳に向かえば大野味噌汁。秋琴楼に仮寓の昔も思い出さしむ。(略)」味噌汁で、思い出した昔の名古屋観光の宿、

それは「秋琴楼」であった。

沢井鈴一の『名古屋広小路ものがたり』によると、「秋琴楼は、名古屋屈指の旅館であったという。そして宮戸松斎『尾張名所図会』には、次のように書かれている。秋琴楼は栄町に在り。其建築の宏大にして壯麗なることは、実は秃筆を以て、これを描写すべからざるものありといへども、先ず其一斑を云はば、即ち旅館に属する家屋の構造は層楼巍峨として屹立し、正面の玄関に相對して前に石門あり。始めて之を一見すれば、官衙の如く、また素封家の住宅の如きものあり。之に隣して楼主の居所あり。次は割烹旗亭あり。庖厨を注意精選するが故に頗る美味なり。是を以て旅館及び料理共に此楼に及ぶべきもの市中広しといへども亦決して他に之あらざるなり。」

名古屋を代表する旅館にふさわしく、明治の元勳、伊藤博文、板垣退助、星亨たちは、この旅館を定宿にした。寅彦先生の父は、此の一級の旅館から、第三師団に通っていたのである。

この旅館の場所を今の名古屋地図で示すと、広小路通、栄交差点から少し西に行った丸栄百貨店（現在は閉店し、ビルは壊している）の西、明治屋（これも閉店し、ビルだけが残されている）があった場所である。付け加えると、隣の伝統ある丸善書店のビルもなくなり、駐車場となっている。

名古屋の一流旅館に同宿した寅彦先生は、紡績工場を見学したり（糸車）、東京大相撲を見たり（相撲）している。さらに、「東上記」で、熱田神宮やその近辺、また船に乗って伊勢神宮や二見が浦へも出かけていることがわかった。

随筆「糸車」には、「名古屋の留守師団に勤めていた父を訪ねて遊びに行ったとき、始めて紡績会社の工場というものの見学をして非常に驚いたものである。」とある紡績会社は名古屋市中区正木町にあった「名古屋紡績」ではないかと思われる。そこは名古屋初の機械式紡績工場で、国の融資を受け、明治18年4月開業をした。ここでは、イギリスから輸入をした紡績機械を蒸気機関で動かした。寅彦先生が見学をしたころは、紡績機2万錘以上、従業員も1000名に近かった。しかし、寅彦先生が名古屋を訪れた3年前、濃尾地



秋琴楼（尾張名所図会）



秋琴楼のあった当時の広小路  
右手前の屋根が秋琴楼



秋琴楼があった場所の現在  
旧明治屋ビル



名古屋紡績  
（写真集明治大正昭和・名古屋）

震が起こり、名古屋でも大きな被害が出た。例えば、明治20年、名古屋紡績に対抗してつくられた尾張紡績は、壊滅的な被害を受けている。寅彦先生の書かれたものには、その濃尾地震の事は一切出てこない。不思議な気がする。

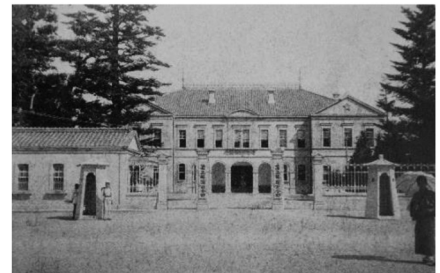
濃尾地震は、明治24年(1891)10月28日に起きた。マグニチュードは8.0、愛知県岐阜県を中心に大きく揺れ、わが国の内陸地震としては最大のものである。建物全壊14万余、半壊8万余、死者7273、山崩れ1万余。根尾谷の大断層を生じた(理科年表)。「東上記」に書かれている「セメント会社の煙突」も、崩壊したと記録がある。この会社は明治23年創業の愛知セメント製造所(名古屋市熱田区白鳥)と思われる。



濃尾地震で、被災した尾張紡績

名古屋を訪ねた時、東京大相撲を見たとき随筆「相撲」にある。日本一の国技館「名古屋国技館」(4階建て、8000人収容)ができたのは大正3年と、もう少し後の事であるから、寅彦先生はどんなところで、大相撲を見たのだろうか。

寺田家一家が名古屋に移った明治12年(1879)父の勤務は、名古屋鎮台であった。寅彦先生が名古屋を訪ねた明治27年は、第三師団司令部と名称が変わり発展している。名古屋城の内堀の近く、現在、水資源機構中部支社があるところである。当時の面影は、レンガ塀の一部にみられるのみである。この辺りは、名古屋の官庁街で、碁盤目割の美しい道路を残している。



第三師団司令部

「東上記」に戻ってみると、「(名古屋で降車し、)丸文へと思ひしが知らぬ家も興あるべしと停車場前の丸万というのに入る。」とある。これを読むと、寅彦先生が名古屋で使い慣れた宿は丸文で、この日は特別に駅前旅館丸万を使ったと読みとれる。丸文は、今の丸の内1丁目、御園通あたりである。沢井鈴一の『名古屋広小路ものがたり』にこんなことが書かれている。「明治32年に、中京新報が料理屋、旅館の人気投票を実施した。(略)旅館の部で、最高点の9,369票を集めたのは、広小路の秋琴楼だ。次いで塀三蔵町の名古屋ホテル、上園町の丸文とつづく。」丸文は人気のある旅館であったことがわかる。寺田家は、いつも立派な旅館を使っていたのである。最高点の秋琴楼は、先に書いた父の定宿である。付け加えると、当時の名古屋駅は、今の名古屋駅から少し東、笹島交差点あたりである。粗末な建物で開業している。

こうして、寅彦先生と名古屋の関係が以前よりも明らかになり、寅彦先生への親密度が一層増したのである。寅彦先生の来られた当時の名古屋へ思いをはせ、歩かれるのはどうでしょう。